様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18530519
研究課題名（和文）　子どもの学校適応とキャリア意識形成の心理的要因に関する発達的研究

研究課題名（英文）　A DEVELOPMENTAL STUDY OF SCHOOL ADJUSTMENT AND PSYCHOLOGICAL FACTORS ABOUT FORMATION OF CAREER AWARENESS AMONG CHILDREN

研究代表者
前田　健一（MAEDA KENICHI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：90101451

研究成果の概要：まず、子どものキャリア意識の発達を捉えるために、小学生から高校生まで適用可能なキャリア意識尺度を開発した。次に、開発したキャリア意識尺度を使用して、小学生から大学生までのキャリア意識の発達を明らかにするとともに、キャリア意識が学校適応、アイデンティティ形成、保護者からのサポート受容感と正関連することを実証した。最後に、キャリア教育によるキャリア意識の向上が学校適応に一定の効果をもつことを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,800,000	0	1,800,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	540,000	4,140,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：学校適応、キャリア意識、子ども

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景として､次の 2 点をあげることができる。

(1)子どもが学校で適応し、成功的な学校生活を送るためには、学業的コンピテンスだけでなく、社会的コンピテンスを習得・発揮する必要がある。社会的コンピテンスは他者との相互作用の中で習得・発揮されるにもかかわらず、学校や社会では言語的能力や数量的能力だけを強調する傾向にある。また、子どもの発達研究においても、子どもを取り巻く家族や学校の社会的システムの中で子どもの知的発達を総合的に捉える研究が必要とされながらも、従来の発達研究は、学力や学習意欲の研究と、子どもの自己や社会性の発達に関する研究とが分離した形で個別に研究される傾向にあった。

(2)現代における青少年の発達状況をみると、精神的発達が未熟で社会的自立が遅れ、高等教育機関への進学率が高いものの、進路意識や職業意識が希薄な若者が増加しつつあり、いわゆるニート問題として社会的にも注目されている。そのため、小学校や中学校の段階から子どもの勤労観や職業観を育成するキャリア教育が推進されている。小学校段階からキャリア意識や勤労観・職業観の育成を目指すためには、各発達段階にある子どもの現在の自己理解や学校適応感に関わる

心理的・社会的要因、あるいは教師や保護者の影響要因等をシステマティックに検討する発達研究が求められる。

２．研究の目的

子どもの将来につながる自己意識の発達をキャリア意識の観点から捉え、子どものキャリア意識と現在の学校適応状況、学校教育、家族関係等との関連を小学生から大学生までの発達段階別に検討する。具体的には、次の 4 点の達成を本研究の主な目的とした。

(1)子どものキャリア意識を捉えるためのキャリア意識尺度を小学生から高校生を対象に作成する。

(2)小学生から高校生のキャリア意識と学校適応感との関連を検討し、高校生と大学生のキャリア意識と自己探索スタイル（アイデンティティ・スタイル）との関連を検討する。

(3)進路選択に直面する中学生と高校生を対象に、キャリア意識と進路選択に対する保護者サポートの関連を検討する。

(4)職場体験学習を経験した中学生を対象に、職場体験学習前後のキャリア意識の変化量に基づいて 3 群（上昇、不変、下降）を構成し、学校適応感を 3 群間で比較検討するとともに、職場体験学習から 10 ヶ月後の追跡調査を実施してキャリア意識の縦断的変化を検討する。

３．研究の方法

上記 4 つの主な目的を達成するために、次の 4 種類の調査を実施した。小学校から高校を通じて実施した調査はいずれも、事前に調査内容や調査実施に関して学校長からの承諾を得て実施した。また、すべての調査において、回答しづらい質問がある場合には、その質問に無理に回答しなくてもよいことを調査用紙に印刷して調査対象者に説明した。

(1)小学生、中学生、高校生の合計 1076 名を対象に、人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定の 4 領域から構成されるキャリア意識尺度および将来の希望職業を明確にしている程度に関する質問を実施した。尺度の信頼性を検討するために、別の中学生 232 名と高校生 525 名にもキャリア意識尺度を実施した。また、中学生 299 名に対してキャリア意識尺度と SG 式進路発見検査を実施して基準関連妥当性を検討するとともに、担任教師に対してキャリア意識尺度の内容的妥当性に関する評定を求めた。

(2)キャリア意識と学校適応感との関連については、次の①から③の 3 つの調査を実施した。キャリア意識とアイデンティティ・スタイルとの関連については、以下の④の調査を実施した。

①調査 1 では、小学生、中学生、高校生の合計 1076 名を対象に、キャリア意識尺度、学業成績の自己評価、職業観尺度を実施した。

②調査 2 では、中学生と高校生の合計 548 名を対象に、キャリア意識尺度、学校適応行動尺度、達成動機尺度を実施した。

③調査 3 では、中学生 232 名に対してキャリア意識尺度を実施し、担任教師に対して各生徒の学校適応状態に関する学校適応行動尺度を実施した。

④調査 4 では、高校生と大学生の合計 1238 名を対象に、キャリア意識尺度とアイデンティティ・スタイル尺度を実施した。

(3)中学生と高校生の合計 867 名を対象に、キャリア意識尺度と進路選択に対する保護者サポート知覚尺度を実施した。また、中学生 163 名とその保護者を対象に、進路選択に対する保護者サポート実行尺度を実施した。

(4)5 日間の職場体験学習を経験した中学 2 年生 85 名を対象に、職場体験直前、職場体験直後、職場体験約 10 ヵ月後の 3 回にわたってキャリア意識尺度を実施した。さらに、職場体験直前と直後には、学校適応行動尺度も実施した。

４．研究成果

(1)小学生、中学生、高校生別に、天井効果の検討、領域別主成分分析、GP 分析等を行い、各発達段階に適したキャリア意識尺度項目の選定を行った。次に、中学生 427 名と 232 名の 2 つのサンプルおよび高校生 453 名と 525 名の 2 つのサンプル間の主成分構造の一致係数から、本尺度が十分な信頼性を有することを確認した。さらに、将来の希望職業の明確度に基づく 3 群間比較を行い、いずれの発達段階においても、希望職業が明確である者ほどキャリア意識が高い傾向にあることが示された。この群間差は、キャリア意識尺度の妥当性を示すものといえる。

また、中学生 299 名と 232 名の 2 つのサンプルおよび教師評定に基づいて、中学生版のキャリア意識尺度が、内容的妥当性、SG 式進路発見検査との基準関連妥当性、8 週間隔のテストー再テスト信頼性、2 つのサンプル間の一致係数のいずれの点においても、十分な信頼性と妥当性を備えた尺度であることが明らかになった。

(2) キャリア意識と学校適応感の関連およびキャリア意識とアイデンティティ・スタイルの関連については、以下の 4 点が明らかになった。

①調査 1 のデータに基づく正準相関分析から、小学生、中学生、高校生に共通して、キャリア意識 4 領域が高い児童生徒ほど、学業効力感や職場での人間関係を重視する対人関係志向の職業観が高いことが明らかになった（表 1)。なお、表中の太字の数字は有意な関連を表す。

②調査 2 のデータに基づく正準相関分析か

ら、キャリア意識4領域が高い生徒ほど、友人に親切にする向社会的行動や授業や学習に真剣に取り組む授業態度を多く示し、自分なりの目標を達成しようとする自己充実的達成動機が高いことが明らかになった（表2）。

③調査3の中学生データに基づき、生徒をキャリア意識の高群、中群、低群に分類し、各生徒に対する教師評定について群間比較を行った。その結果、キャリア意識の高い生徒ほど、担任教師から授業や学習に真剣に取り組み、理系や文系の成績がよいと評定される傾向にあった（図1）。

④調査4のデータに基づく正準相関分析から、性別や学年に共通して、キャリア意識の高い高校生や大学生ほど、積極的にアイデンティティ形成を行う際に使用する情報スタイルの認知的処理を使用することが明らかになった（表3、4）。

表1　小中高校生のキャリア意識と学業効力感および職業観

	小学生	中学生	高校生
キャリア意識			
人間関係形成	**.86**	**.92**	**.83**
情報活用	**.82**	**.83**	**.72**
将来設計	**.66**	**.87**	**.88**
意思決定	**.93**	**.83**	**.62**
（冗長性）	.19	.26	.12
学業効力感と職業観			
性別	.12	.20	**.51**
学業効力感	**.79**	**.64**	**.31**
対人関係志向	**.64**	**.79**	**.72**
待遇・地位志向	−.05	−.06	−.25
（冗長性）	.06	.09	.05
正準相関係数	.51	.58	.45
F	5.21	14.73	8.23
df	16, 574.99	16, 1280.7	16, 1360.1
p	<.0001	<.0001	<.0001

注）性別は男子を1、女子を2として分析を行った。

表2　中高生のキャリア意識と学校適応行動および達成動機

	中学男子	中学女子	高校男子	高校女子
キャリア意識				
人間関係形成	**.73**	**.87**	**.94**	**.88**
情報活用	**.82**	**.84**	**.73**	**.66**
将来設計	**.94**	**.87**	**.75**	**.84**
意思決定	**.83**	**.93**	**.87**	**.91**
（冗長性）	.40	.61	.42	.45
学校適応行動と達成動機				
規律性	.29	**.31**	.12	−.14
向社会性	**.59**	**.68**	**.58**	**.57**
攻撃性	−.11	−.16	−.08	−.06
孤立性	.12	−.16	**−.53**	**−.43**
授業態度	**.70**	**.66**	**.43**	**.46**
自己充実的	**.90**	**.88**	**.85**	**.88**
競争的	.23	**.39**	**.52**	.11
（冗長性）	.17	.27	.19	.16
F	5.78	11.55	7.31	11.03
df	28, 347.56	28, 383.61	28, 502.59	28, 589.13
p	< .0001	< .0001	< .0001	< .0001

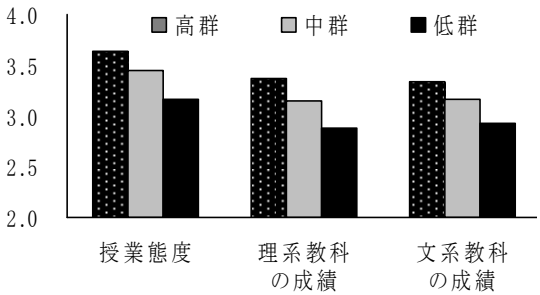

図1　キャリア意識に基づく3群別の学校適応状態の教師評定

表3　男子高大生のキャリア意識とアイデンティティ・スタイル

	高校1年	高校2年	高校3年	大学生
キャリア意識				
人間関係形成	**.66**	**.84**	**.56**	**.81**
情報活用	**.74**	**.67**	**.74**	**.62**
将来設計	**.94**	**.85**	**.83**	**.89**
意思決定	**.62**	**.79**	**.69**	**.72**
（冗長性）	.28	.32	.08	.28
アイデンティティ・スタイル				
情報	**.91**	**.96**	**1.00**	**.87**
拡散/回避	**−.72**	**−.71**	**−.37**	**−.75**
（冗長性）	.38	.34	.08	.29
正準相関係数	.75	.69	.33	.66
F	12.74	10.16	2.16	7.33
df	8, 170	8, 176	8, 184	8, 136
p	< .0001	< .0001	< .05	< .0001

表4　女子高大生のキャリア意識とアイデンティティ・スタイル

	高校1年	高校2年	高校3年	大学生
キャリア意識				
人間関係形成	**.40**	**.61**	**.74**	**.70**
情報活用	**.90**	**.58**	**.86**	**.88**
将来設計	**.64**	**.87**	**.59**	**.60**
意思決定	**.64**	**.75**	**.76**	**.82**
（冗長性）	.15	.19	.17	.18
アイデンティティ・スタイル				
情報	**.89**	**.83**	**.94**	**.99**
拡散/回避	**−.64**	**−.81**	**−.58**	−.29
（冗長性）	.18	.24	.18	.15
正準相関係数	.55	.58	.54	.55
F	9.26	8.41	7.68	7.23
df	8, 316	8, 242	8, 248	8, 230
p	< .0001	< .0001	< .0001	< .0001

(3) 中学生と高校生のどちらにおいても、進路選択に対するサポートを保護者から受けていると感じている生徒ほど、4 領域のキャリア意識が高いという関係にあった（表5、6）。また、階層的重回帰分析（表 6）から、保護者が実際に行っている進路選択に対するサポートは、中学生のサポート知覚を媒介して、中学生のキャリア意識に正の影響をもつことが明らかになった。

(4) 職場体験学習の直前と直後のキャリア意識に基づいて、生徒を上昇群、不変群、下降群に分類した。3 群の特徴を明らかにする

ために、職場体験学習直前のキャリア意識得点を統制し、職場体験学習直後のキャリア意識について群間比較を行ったところ、上昇群の生徒は人間関係形成と情報活用の２領域でキャリア意識を高めたのに対して、下降群の生徒は４領域すべてのキャリア意識を低下させたことがうかがえた（図２)。

職場体験学習の効果の有無と学校適応行動の関連について、職場体験学習直前の学校適応行動得点を統制し、職場体験直後の学校適応行動得点について群間比較を行った。その結果、職場体験学習の経験は中学生の規律性を高めるのに有効であることが示された（図 3)。また、職場体験学習から 10 ヶ月後の追跡調査では下降群のキャリア意識も回復していることが明らかになった（図 4)。さらに、職場体験学習直前（β=.40～.55、*ps* <.001）と職場体験学習直後（β=.46～.56、*ps* <.001）のキャリア意識が、10 ヶ月後のキャリア意識に対して有意な正の影響を与えることも示された。

表5 高校生のキャリア意識と保護者サポート知覚

キャリア意識	
人間関係形成	**.85**
情報活用	**.83**
将来設計	**.62**
意思決定	**.75**
（冗長性）	.12
サポート	
学年	.22
性別	.48
情緒的サポート	**.89**
情報的サポート	**.50**
（冗長性）	.07
正準相関係数	.45
F	14.17
df	16, 2127
p	<.0001

注）性別は男子を1. 女子を2として分析を行った。

表6 中学生のキャリア意識に対する保護者変数とサポート知覚の影響

	保護者変数→キャリア意識	保護者変数→サポート知覚	保護者変数, 媒介変数→キャリア意識
保護者変数			
待遇・地位志向	-.18 *	-.18 *	-.10
人間関係志向	.11	.02	.10
サポート実行	.23 **	.38 **	.06
媒介変数			
サポート知覚	—	—	.44 **
R^2	.09	.17	.25
F	5.39	10.59	13.48
df	3, 159	3, 159	4, 158
p	.00	.00	.00

注）表中の数値は標準偏回帰係数を表す。
＊p < .05, ** p < .01。

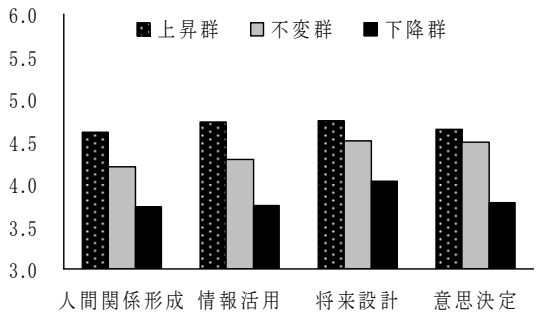

図2 職場体験学習直後のキャリア意識得点

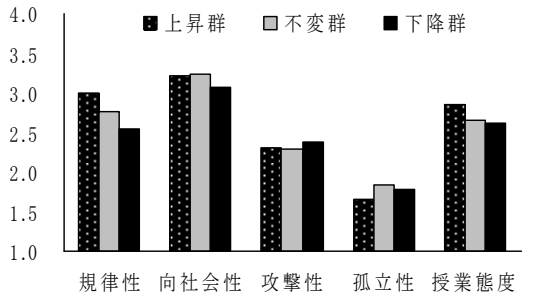

図3 職場体験直後の学校適応行動得点

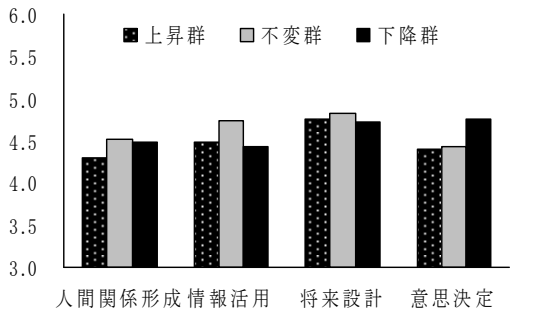

図4 10ヶ月後のキャリア意識得点

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

①新見直子、<u>前田健一</u>、小中高校生を対象にしたキャリア意識尺度の作成、キャリア教育研究、27、43-55、2009、査読有

②<u>前田健一</u>、中條和光、木本一成、風呂和志、簑島　隆、實谷富美、新見直子、中学校におけるキャリア教育とキャリア意識の形成（2)、広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要、37、263-274、2009、査読無

③新見直子、<u>前田健一</u>、中学生のキャリア意識と家族・友人に対するコミュニケーション内容の関連、広島大学心理学研究、8、67－75、2009、査読無

④<u>前田健一</u>、佐久間愛恵、新見直子、中学生の教師信頼感・友人信頼感と学校適応感の

関連、広島大学心理学研究、8、53－66、2009、査読無
⑤Niimi Naoko、Maeda Kenichi、Basic skills for career development and identity style of Japanese high school students、広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）、57、235－244、2008、査読無
⑥前田健一、中條和光、木本一成、藤井志保、箕島　隆、藤田敬子、新見直子、松田由希子、中学校におけるキャリア教育とキャリア意識の形成、広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要、36、359－365、2007、査読無
⑦松田由希子、前田健一、大学生の職業選択未関与におよぼす自己効力感と親や友人からのサポートの影響、広島大学心理学研究、7、147－158、2007、査読無
⑧新見直子、前田健一、越中康治、松田由希子、淡野将太、大学生のアイデンティティ・スタイルとキャリア発達の基礎スキル、広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）、56、253－261、2007、査読無
⑨新見直子、江村理奈、滝下雅子、松田由希子、前田健一、中高生の職業的選好と将来自己の評価、広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）、55、315-320、2006、査読無

〔学会発表〕（計 14 件）
①Niimi Naoko、Kenichi Maeda、Toshiaki Kato、Career awareness and parental support in Japanese junior and senior high school students、11th European Congress of Psychology、(accepted)、2009 年 7 月 7～10 日、Oslo Congress Centre, Norway
②新見直子、前田健一、中学生のキャリア意識の発達と学校適応要因との関連、日本発達心理学会第20回大会、2009年3月24日、日本女子大学
③新見直子、前田健一、キャリア意識に及ぼす職場体験学習の影響、日本教育心理学会第 50 回総会、2008 年 10 月 12 日、東京学芸大学
④新見直子、前田健一、中高生のキャリア意識と学校適応感の発達的検討、第 72 回日本心理学会、2008 年 9 月 20 日、北海道大学高等教育機能開発総合センター
⑤前田健一、新見直子、中高生のキャリア意識と学校適応感の発達的検討、第 72 回日本心理学会、2008 年 9 月 20 日、北海道大学高等教育機能開発総合センター
⑥Niimi Naoko、Kenichi Maeda、Effect of academic self-efficacy and work values on career awareness of elementary、junior high、and high school students、XXIX International Congress of Psychology、2008 年 7 月 21 日、Internationales Congress Centrum ICC Berlin, Germany
⑦Niimi Naoko、Kenichi Maeda、Effects of parental work values and social support on career awareness of Japanese junior high school students、66th International Council of Psychologists、2008 年 7 月 17 日、Azimut Hotel (St. Petersburg, Russia)
⑧新見直子、前田健一、高校生のキャリア意識に対する自己効力感、親サポート、アイデンティティ・スタイルの関連、日本発達心理学会第 19 回大会、2008 年 3 月 21 日、大阪国際会議場
⑨新見直子、前田健一、大学生のキャリア意識とアイデンティティ・スタイル、日本カウンセリング学会第 40 回大会、2007 年 11 月 25 日、琉球大学
⑩新見直子、前田健一、高校生のキャリア意識と親サポート、中国四国心理学会第 63 回大会、2007 年 11 月 23 日、島根大学
⑪松田由希子、新見直子、前田健一、大学生の進路選択への関与と自己効力感やサポートとの関連、中国四国心理学会第 63 回大会、2007 年 11 月 23 日、島根大学
⑫新見直子、前田健一、中学生と高校生のキャリア意識、日本心理学会第 71 回大会、2007 年 9 月 18 日、東洋大学
⑬新見直子、前田健一、加藤寿朗、越中康治、中学生版キャリア意識尺度の開発、日本教育心理学会第49回総会、2007年9月15日、文教大学越谷キャンパス
⑭Niimi Naoko、Kenichi Maeda、Basic skills for career development and identity style of Japanese high school students、Xth European Congress of Psychology、2007 年 7 月 4 日、Prague Congress Center, Czech Republic

６．研究組織
(1)研究代表者
前田　健一（MAEDA　KENICHI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：90101451

(2)研究分担者

(3)連携研究者
加藤　寿朗（KATO　TOSHIAKI）
島根大学・教育学部・教授
研究者番号：30274301